い姿です。舍のお母様の先生一年中かかさずの毎朝の冷水浴の効果がいつもお丈夫で大きい赤ちやんたちのお世話をして下さいましたことに病氣の時今は牧者令夫人としてすつかりママ様になられた松代様と「ナベヤキ」などねだつて先生を苦しめた我がまゝなどお恥しく思ひ出されます。直觀と思索のH先生に理窟のかぎりを申上げ時には職員室まで押かけて細身のK先生に笑はれた事も度々でしたそして一層先生のおつむを今日のごとくした様な氣さへする時もあります。今でさへ時たま何かと申してゐるのは何かのえにしでせう。櫻花散る頃バラ咲く庭戰の世におくられる者に大きく笑ひかける紫陽花廣い芝生今なほ多くの純情な姉妹方を抱きつゝある事でせう。親しき友との語らひ眞實な祈りに手を取りあつた場所など幻のごと浮びます。山の上に新築された寄宿舍木の香のよさと共に廊下をふきこむのに骨折つたのも樂しい過去の思ひ出の中に織れています。ストーブと私はつきものでした議論して泡とばしたのもおそくまでねむりこんだのもつみないものとなりました。忘れがたない色々の事柄も過去のベールの中に美しいものとなつています。

東西南北に使命をことに生きつゝありますクラスの皆様お互ひクラスの精神を思ひ出しませう。南國にて皆様のしんがりからおちおちと歩みゆく身も母校の名をきづつけまいとつとめています。山の上に輝く燈臺として母校が使命を果すと共にその燈臺から一つ一つ手わたされたローソクの光を消す事なくはげみませう。

愛のまなざし深い主の瞳をみ上げつゝ希望と感謝に一切を捧げてゆきませう、主は今日もすゝまれつゝあります續いて行きませう。この秋の記念會に神の優握なる御恩寵を祈つてペンをおきます。

愛する母校を思ふ

園田　照惠

トラピストの修道院にはあらねども同じような聖き祈りの空氣を充分に豫想し、また憧れて神學校の門をくゞる若き魂が過去いく多あつたでございませう私もその中の一人として一切の希望と感激とをこめて一線に眞實一路を突進してきたのでございました。

そして四年に渡る學窓生活ははたして何を私共にもたらしてくれたでせうか。若き生命の躍動は時には憤慨となり時には歡喜ともなり血もにじみ泪もひそんでまいりましたが結極は矢張多大の感謝でございます。偉大なる人格も築き得ず深淵なる神學も持ちは致しませねど唯しみ〴〵と眞心より恩寵に感ずる心を養てくれた神學校の四ケ年を思ふと私は確に勝利を覺えるものでございます。私は自らの空虛さに嘆き四ケ年にあまり賜を貯へ得なかつたことについて自らを悔ひ改めも致しま

すが、しかし私は朝に祈り夕べに祈り我が生けるは主にこそよれと神なしで一時も生くる能はぬ自己を凝視する時單純なれど一すぢのこの信仰こそ神學校があたへてくれた最大の賜であると今更のように感謝致すのでございます。長き傳統！長き歴史をもつ私共の母校の姿は決して社會に華々しくそびへてもゐませねどこうしてじみにうちにひそむ力をもつて幾多の魂に信仰の焔をじり〳〵と植ゑつけてゐるのでございます『共立神學校、そんな學校もあるのですか』と世の人は今更のようにもう五十年の年月をもつ、古き母校の存在を驚いたり致しますが華かに世に知られぬ丈にじみに實直に默々と五十年の間幾百の魂を養てはぐくんでゐる母校に尊敬を遙にさゝげる者でございます「共立には神學がない」と同志の學徒らが批難致します、その點まことにその通りかもしれません、しかし神學がなくとも信仰はある。ゆるがし得ない焔ゆる信仰がある、私はそんな批難にたいして無言の中にこの抗辯を確信を以つて致します。母校はこれからまだ〳〵成長しなければならぬ幾多の缺陷もあり幾多の失敗の跡もある。でもこゝで萬事が終つたのではないもつと〳〵成長してくれるに違いない、もつと完成されるべく努力をもつてゐる母校である。私共は切に〳〵このために祈り願はねばならぬのでございます。

この世の榮、この世の歡樂に醉ふ暇もなく若き生命をしんみりと祈りの中に四ケ年を過してきてはじめて私は自らが更に主に近く神に近づいたことを一體誰に感謝致していいのでございませう。決してこれは自己にあるのでなく神である神がこの神學校生活を通じて私にはたらきかけてくれたのでございます。

「神學校」　私共の母校神の名によりてたてられたこの學校こそ主の御手は一入にそへられてゐるに違ひありません、私は神に感謝するとともに母校を更に思ひます。

愛する母校更に〳〵輝すべく各自一人〳〵が責任もち自重しなければならぬことを思ふと私はほんとに恥じ入つてしまひます、足らぬ乍ら汚れ多けれど私は神にたいする感謝の心をまた母校に注ぎたいものと存じます。遠い異國よりはる〴〵とその身を献身して下さつた開校時代の諸先輩の熱と意氣とをうけてもつと學校の意義を考へねばならぬでありませう。

既にこゝより巣立れし方々またこれより巣立れんとする方々の魂を主は一層に惠み給まふであらうと私は眞劍にこう思ひます。

聖き祈りと聖き願望に只管に生きんと努力される魂を一人でも多く母校はうけ入れてくれるよう、神學校の存在は世人には榮光なくとも神の前には榮光あるものであらしめたうございます。そして色々の缺陷を次第に滿しつゝ更に〳〵成長してくれるよう神の御助けを仰ぎ願つてやみません私共の在學四ケ年の間に母校は確に成長も致しました入學當時の學校と卒業前の學校の内容にはかなりのよき變化がございました。この變化こそ絶えず〳〵續けらるゝよう切望致します。一切を忘

れて神を思ふ心。只管なる修道の心。母校よどうかこれからのちに來る若き魂に強く根深く養てゝ下さいあゝ五十年の歴史に生くる母校よ私はその中にひそむ幾多の先輩の血と泪の歴史を思ひ各自が自重し自覺して主の御榮のためはた學校の使命のためにつくしたいものだと存じます。

大震災の思ひ出

飯田せき

人類の歴史上、今古いまだその比を見ることの出來ない、あの大震災のあつた前日、即ち大正十二年八月卅一日に毎年在校生特に卒業生の爲めに開催されました母校の夏期聖書學校も終りましたので、九月一日私は千葉の傳道地でお働きになつてゐる谷口八重子さんの處へお助けに參らうと思ひたち、早速お土産を買ひとゝのへる爲め野澤屋へ行かうと思ひました。然しその日は珍らしくもいやに蒸暑い日なので見合せてお洗濯をして居りました。其處へ何時もの八百屋さんが參りましたので、塚原先生が何か御注文なさいました。軈て食堂のベルが鳴なる。塚原先生をお誘ひしやうと思ふその途端、あの慘たる大震災が突如として起りました。折しも私は舍監室に居りましたが、ハット思つた時は最う既に床が落ちてゐました。今しも廊下にお腰をかけてゐた筈の二の棟の某さんはと氣のついた時は壞れた家の屋根の上にのつかつてゐられるのです。襖は倒れる、押入の行李は落ちてくる、茶簞笥は飛び出す、歩かうとしても震動の爲め一歩も踏み出せないので御座いませう只もう魂消えてあとは暫らく何んにも分りませんでしたが、夢中で煮え滾ぎる鐵瓶のお湯で火鉢の火を消し止めたことと、濛々たる沙煙の中で塚原先生が飯田さん、飯田さんと私のことを心配してお呼び下さつたことだけは、今も新たな印象として腦裡に殘つて居ります。

物音に驚いて不圖見れば何處からともなくパッと白い煙の中に火が見えました。そして學校の賄方は折しも食事の準備最中でした。當時構内に居りましたものは、大震後十分間もたつかたたぬ間に皆申し合せたやうに、校庭の芝生の上に落ち合ひました。何れの方々も只浴衣一枚着たなりで何に一つ持ち出したものはありません。獨り塚原先生は其日の朝、禮拜の司會をなさいましたので御身形はきちんとして足袋までおはきになつてゐらつしやいましたのが人目を引きました。大地は相變らず搖れ通しで臺所のお婆さんの見えないのに氣がつきましてその旦那さんに尋ねますと、落膽しきつた口振りで「最う婆さんは駄目です」と仰有るのです。小使のお婆さんは一時臺所の屋根下につぶされてゐるので、その御主人ももう押しつぶされたものとのみ思ひあきらめて居られましたが、幻の如やうに私共が選難して居りました校庭の芝生の上に現はれました。そして其處にお婆さ

んのお娘さんが健全でゐられるその姿を見るやその娘さんの名前を呼びながら嬉しさの餘り氣絶して倒れてしまひました。私共はそのお婆さんを門則の燒け殘つた家へ移して介抱致しました。其日の夕暮までに約三百人の避難者が、私共の芝生の上に押しかけて參られました。是等の人々は重に伊勢佐木町、千歳町、松影町方面の方々でしたが中には遠方より參られ人々も打ち混つて居りました。此人々の中にて、今も忘るゝことの出來ない祈禱會を私共八九名の者共が致しました。後日伺へば避難者の方々が眞の神を信ずる基督信者は變事に際しても落着きのある者だと云つて感心せられたとのことでしたが、私共の內心は仲々泰然自若どころの沙汰ではありませんでした。幸ひ門側の家にお米がありましたので、おにぎりにして頂き、五郎さんが南太田の中野醬油店から「モロミ」を貰つて來られましたのでそれをも頂きましたが、横濱で當時疫病が流行しなかつたのは此「モロミ」の爲めであつたと云はれます。

何が一番嬉しかつたと申しましても、第二日目に男の毛利先生が御見舞に來て下さいましたことゝ、三日に松尾先生、それから笹倉先生や海岸教會の方々が御訪問下さいましたあの力强さは生涯忘れることは出來ません。地は絕えず鳴りどよめき、橫濱は固より遠く鶴見、川崎、東京、橫須賀邊までの火炎が天をこがし、不眠の中に夜は明けました。二日目の晩から起りました朝鮮人騷ぎ、窮迫せる避難民の掠奪などで、私共學校なども寶物が皆燒け失せてよかつた。若しあつたらその寶の爲めに私共の生命は無かつたかも知れません。お隣近くのお家では寶物をバケツに入れて、地中に埋めた程物騷でした。燒跡の火は二三日泣くが如く、恨むが如く燻つてゐましたが五六日間は、灰は熱くて近よれませんでした。陸戰隊は八幡橋に着く、十一日目でしたが梅干や、パンが頂ける十二日目にはミセスリンが歸られる。日に增し安定を得ましたが、城戸先生が旅行から萬難を忍んで徒步で御歸校になり母校や神學校の見るも無慘な姿に變り果てたその燒跡で塚原先生と握手してお泣きになつた涙ぐましい有樣や、私共が手に手に水を用意して城戸先生の萬一の卒倒にそなへて却つて先生を驚かしたことなどや、藤原さんが吉田橋下で一晩川中につかつてゐて、自ら避難しながら、二人程人を御助けになつて、翌日學校へ無事に御歸になつた美談など永久の思ひ出となりませう。

謝辭

佐藤哲子

今日は米國に於て外國傳道會社創立百年紀の祝賀會が開かるゝとの事で私共本校で教育を受けた同窓生達も此の東洋の一隅から遙かに祝賀と感謝の意を述べ度と思ひます。百年と申せば一世紀此の如く永く繼續された事業は他に何處にありませうか、之れ神の御事業であり又神を敬ふ篤信家達

の經營に成る事業なればこそ此の樣に永續したのであります。年數から申せば一世紀、範圍から申せば世界を抱括して居ると申ても過言でないでせう、又其に投ぜられた資金は莫大なものでありませう殊にその事業の爲に拂はれた尊い犧牲は幾何でありませうか計り知る事は出來ません、實に盛なりと申すべきであります。

米國に於ては定めし盛大なる祝賀會が開催されて居る事でありませう、私共も熱誠を込めて祝し度と思ひます、私共は直接間接に此の傳道會社に負ふ處多大であります、今日此の樣に文明の教育を受け靈の眼が開かれて救に導かれ永遠の生命に與かる事が出來る樣になつたのは、皆母校の賜物でありますが、私共は誰から直接に之を授けられたかと、申せば宣教師方からであります、併し聖書にあります通り「遣されずば爭で宣傳ふることを爲ん」であります、もし宣教師が傳道會社により遣はされなかつたならば、私共はどうして道を聞く事が出來ましたでせう、道を聞きませんでしたならば、私共今日如何なる有樣であつたでせう實に私共は暗黑の中に迷つて希望もなく喜悅もない、悲慘な生涯を送つて居た事でありませう。此の宗教教育こそは眞の人間を造る上に於て欠くべからざるものであります、もし之なくば他の教育は無價値に終るでありませう。其れ故此の宗教教育を受けました私共は傳道會社に對し負ふ恩義は多大と申さねばなりません、私共は如何にして此の恩義に酬ゆる事が出來ませうか、既に家庭に於て社會に於てキリストの精神を以て爲されて居る事業は其報恩の一部となるでありませうが、私共目を擧げて現今我邦の狀態を視ますれば神を畏れず人を敬はず道德は廢頽して實に危機に瀕して居ると申さねばなりません之を救ふ道は何處にありませうか、憂國の人達は起ちましたが方法を誤りました、私共は傍觀して居られませうか、私共の中から起つ人は無いでありませうか、起つて國を救ひ社會を救ひ同胞を救ふ人は無でせうか、實に國家を救ひ人を救ふ道はキリストの十字架を中心とする宗教より外にありません、最早日本に宣教されましてより七十三年、本校が創立されてより六十有餘年を經過致しました、私共は唯々助けられて居るのみではなりません、自ら起つて歩むべきであります、どうか私共覺醒して起ち各力の及ぶ限りを盡して神の御國の建設の爲に盡し度いものであります、之こそは謝恩の道であると思ひます私はミッションに對し祝辭と感謝を述ぶると共に同窓諸姉妹の覺醒と奮起とを希望して止まないのであります、終に神の裕なる御祝福傳道會社の上に末遠永にあらん事を同窓生一同に代り祈る次第であります。

記憶すべき五先生

K、　　H、

良い教員を得る爲めに師範學校や、教員養生所が設けられてあるやうに、宣教當初に於ける私共

の學校では何處からでも容易に適當な先生を御招きすると云ふわけには參りませんでした。が神樣の御計劃は人の思ひもよらない方法をもつて既にちやんと御備へ下さいました。其は當初の神學校にとりましては共立女學校は誠に良き此上も無い神學教師養成所の感がありました。先づ第一に共立女學校を卒業してビヤソン先生に選拔されたのは米澤みね子さんでした。米澤さんは多藝多能なお方で聖書、音樂、漢文、ローマ字等を教へられましたが、一番お得意なのは漢文でありました。お祈りはお上手と申し上げては語弊がありませうが、それは敬虔な言葉の整つた立派なお祈をなさるので今も尙記憶せらるゝお方で御座います。惜しいことには蒲柳の質で御病氣勝ちの日を御送りなさいました。

次は原田薔薇さんです。矢張ビヤソン先生がお呼び寄せになつたお方で、ミス、ブラット校長の大切な補助者であり、又日本語の先生でした。英語には分けて天才的な賜の豐かな持主でおねでゞした。それは巧みにミス、ブラットの通譯や、米國行の手紙の飜譯をなさいました。神學校では聖書並に音樂を御擔任なさいました。

次に擧げなければならないのは城戸順子先生です。先生は共女を御卒業後先づ第一にミス、ブラットに日本語を教へ、ミスハンドの樣々な飜譯にもあたられ、殊に禮拜の說教や、講演、其他教室に於けるお講義の原稿を飜譯なさいました。城戸先生の共女時代の聖書の先生は湯淺いと子先生でありました。其頃は神學校の教室と申しましても、日本造りの疊の上で皆坐つて御稽古を致したものでしたが、城戸先生の受持は專ら聖書でした。此時始めて聖地地理が新科目として加へられることになりました。またその當時日本語には勿論そのやうな教科書や參考書などのあらう筈もなく、先生は英語の書物を飜譯してはお教へになつたやうでした。聖書の教授は當時城戸先生よりは人生の經驗に於ても、特種の學問に於ても、將又年齡の點に於ても遙かに勝れてゐる方が生徒の中に多かつたので（例へば北川てふ、猪股はな、西村はるよさん方の如く）仲々先生は御苦心が多かつたやうに思はれました。或時先生が、その當時の一時間は四十分でありましたが、その四十分が二時間にも三時間にも價したと仰せられましたが、これはお年の若い先生が俄かに引き上げられて、專門の學科を而も年長の有力な方々に教へる氣苦勞さ加減を雄辯に物語るもので御座いませう。當時先生から教へを受けた學生方は、先生は極めて無口な、そして嚴格な先生で、眞面目に教へられたから、正確に豫習をしなければ先生の前へは出られなかつたと申して居ります。然しこうした先生が今も尙その謙遜な用意周倒な行きわたつた教授ぶりを十年一日の如くお續けになつて、私共學校の爲めにその御一生涯を献げられ、傍ら溫い御氣分で母校の爲めにもお盡しになり、兩校教職員の親和一致の繫ともなつてゐて下さることは誠に尊いことに思はれます。

次は田中靜さんです。此お方はミス、ハンドが日本に參らるゝにつけ、卒業生の中から選拔され

て補助者とおなりなさいました。城戸先生とは御同級の間柄でミス、プラットが一寸御歸米なさいましたそのお留守中專らミス、ハンドの日本語を助けられ、城戸先生が創始せられた聖地地理をも御受持になつたり、その他教理や、音樂をも教へられ又屢傳道の爲め宣教師のお共をして地方へも參られました。田中先生は藤田家へお嫁になつてからも音樂の教師として學校へ參られました。

最後に飯田こと先生ですが、先生は熱心に體操を教へられ全校の意氣を引きしめ、規律を嚴正にして下さいました。城戸先生が渡米中は代つて食堂の一切の御世話をなさいました。又ミス、アロードの爲めにもお盡し下さいました。

尙忘れてはならないお方は片桐先生や、吉田信子、松平しゆん、湯淺いと子先生で御座います。このやうに共立女學校の卒業生の方々がミス、プラット校長を始め學校の爲め忠實に御盡し下さいました結果、學校も時代とともに漸次進歩發達致しまして、その學科の程度も次第に高まりまして遂には共女を御卒業なさいました方々を生徒として御入れするやうになりました。井上のぶ、中嶋わさ、小山千慈、松本しゆん、橋本みち、水口げんさんの如き、ミス、プラットの舊約聖書の專攻科生徒と御なりなさいました。今や何時も祈りの中に覺えました校舍も改築せられミス、プラットを始め諸先生方が御壯健で母校の爲めにお盡し下され、校運が日々に隆盛に赴きますることは感謝に耐えません。天父の御恩寵が幾久しく諸先生の上にあらんことをお祈りいたします。

食堂小史

城戸　順

初めミセス、ピヤソンは生徒が殖えれば建て殖えれば建て增して遂に生徒の寄宿舍は四棟になりました。中二階家一棟七間のものは最古ものでありまして大抵他の平家の間數は五六間でありました、第一回の卒業生の丸さんの奥樣や第二回の卒業生の北川さんなどもお住ひになつたものですが震災と共に皆烏有に歸してしまひました。而して年長の生徒は各室に於て自炊して居られましたがミセス、ピヤソンが御永眠になり、ミス、プラットが校長におなりになりました明治三十四年頃自炊を止めて共立の大食堂（二百人以上の人を收容することが出來ました）に合併せられました。而して老若の區別なく一處に打ち混つて食事を致しました。傳導學校に浦さんと呼ぶ下男がゐられましたが、お給仕など皆苦學生の男子を雇ひました。久保嘉七の賄の最初の時代でしたか、

「生等今朝安眠致し、從つて飯も未熟につき御用捨を乞ふ」

と云ふやうな面白い氣拔な御挨拶などもありまして、一同笑ひくづれたもので御座います。當時（明治四十一年）賄の御世話係は湯淺いと先生と私で御座いました。私が渡米するに就て留守中岡添すみ（只今は市川）さん並に飯田（只今の中村萬作夫人）さんが城戸に御代りになりましたが、城戸

が歸朝後再びお世話を致しましたが大正三年滿洲へ傳道に參りまするやうになりまして、馬場きく（只今の三橋）さんが御代り下さいました。三橋氏に嫁せらるゝやうになりまして大正十一年藤波愛子さんがなさいまするやうになりました時に食堂は又共立女學校と分離して神學校の寄宿舍の一隅に食堂を設けられました。震災後講堂の側にバラックにて臺所を建てこゝで食事を致しましたがその後今日の新寄宿舍に移りました。

因に舍監のことを申し添えておきませう。ミス、ブラットが校長となられまして、岩村もと子さん（小崎千代子女史の母堂）を擧げられまして傳道係を兼ねて舍監とせられました、此お方が御永眠せられまして柏壁町に傳道せられてゐた鈴木みよ姉（第七回卒業生）が就任せられ後藤波愛子さんが舍監專務におなりになり續いて大正十二年四月山本直子さんが來られました。

岩村もと子刀自略傳

此略傳はミセス、ピヤソン女史のものせられたるものなり。今その大意を譯してわが校の爲め、終始一貫忠誠をさゝげられたる刀自の貴き面影を偲ぶ一助とはなしぬ。

此の傳記の主題たる岩村もと子刀自は舊行政の下で生れた。即ち大政奉還二十四年前、一千八百四十三年帝國の東都たる江戸、（現在は東京と稱されてゐる）に生れた。

彼女の兩親は靜岡縣の生れで、舊封建制度に於ける大名に仕へた武士の中でも高官に屬していた。家族は二人の男兒と、八人の女兒で、彼等は當時の國民精神に依つて教育せられた。

住居は大名の城下であり、家には遠い時代的な設備や、豪奢な物を十分に備へていた。又種々な果樹は、高い頑丈な牆壁の圍の中に生ひ茂つてゐた。そして廣い、丸い、深い池には、澤山の魚がおり、且つ屋敷でも優れたる場所を占めてゐた。一方の小山には生でも或は料理しても食べられる。一種のお芋が澤山植えられてゐた。彼女の父は嚴格に家族を教育し、誰も彼の打ち克ち難き意志に逆らおうとはしなかつた。小供等は佛教主義によつて教育され、遠き祖先の精靈を崇拜し、定められたる規律や、儀式で偶像禮拜を行つた。祭は主に銀河に近い、織女星の祭（七夕祭）や、國家的の意義深い九月一日の皇室の御紋章である菊の花の祭。（菊の節句）惠深い觀音樣が祈に答へて人類を祝福する千手觀音樣の祭とであつた。

この假想的な存在の祭禮は非常な盛儀と、歡喜の中に行はれた。

斯かる環境の中に生育されたもと子刀自は、矢張彼等が崇拜する神の恩惠を希つて、彼等の迷信に從ひ、毎月十七日には祈禱に對する答を得むとて、鹽斷ちしたり、御馳走を食べることを禁じた斯くして年月は、何事もなく無事に過ぎたが、後年に於て發現せらるべき變化の萠芽が、既に、こ

の沈思せる深味の中に現はれそめてゐた。

武士道的制裁の嚴しき時代に於て、若人の間に於ける、愛のローマンスはなかつた。結婚は兩親とか、或は相手方の親戚などに依つて、便宜上取りまとめられた中には報酬を目的としたり、家族の利害關係などに依りて、取り極められもした。

岩村もと子刀自は二十歳の時、彼女と、同格な官位の而も權能ある武士と結婚した。彼等結婚生活の最初の數年間に、三人の子供が與へられたが其の時代の終了と共に兩親は、相次で死亡した。將軍は大政を奉還し、彼一個人の領地として、靜岡縣を受けた時、家來を從へて靜岡の首都に隱退した。

これ等家來の間に岩村家の人々もをつた。然し封建制度の廢止とゝもに彼等が誇りとしてゐた官位を始め一切のものを失つた。

政事の變遷、改革は、根底から差別を撤廢して、稱號や領地を一掃した。然しもと子刀自の夫君は尊敬せられてゐた。而して明治五年に天皇の名により裁判所の最高官吏に任ぜられた。彼は五年間幸福な意に適つた職に任じてゐた。然し惜いかな間もなく病の爲めに長逝した。

年若き小供等の教育を始め家政一切の重荷が當時未だ尙うら若き世慣れぬ寡婦の双肩に負はせられた此の時代に於て新教は既に開港場に於て微々たる足どりながら進歩してゐた。且つミッション

スクールが横濱と東京とに設立されてゐた。彼女の娘の中二人は其等の學校の中の一つに入學させられ、其處で、彼等は熱心なる信者となつた。姉は教會の卓越せる牧師（小崎弘道氏）と結婚し、一方の妹は聖なる信仰の道には入つたが肉體弱く、彼女の息子も亦病死した。

斯く夫に先だゝれて、岩村もと子刀自は自分の傷つける精神に對する慰安、又言ふに言はれぬ悲しみに對する慰安を見出す可き所を知らなかつた。只殘れる娘が、彼女の贖の爲に死せる神イエスの愛の中に、救の秘藥を見出し得ると云ふことを彼女に保證した。そして永い間決して衰へない美しさと、力に充てる、情味ある祈禱が神に捧げられた。この娘の愛の唇より發せられた祈りが次第〳〵に母を神に近づけた。

「働き、且つ重荷を負へる總ての者よ、吾に來れ、さらば吾汝等に休息を與へん」（太十一〇廿八）

此の命令に從ひ、約束が滿された。明治十九年に彼女は吾々の聖書教師養成所に入學することを許された。此處に於て、彼女の龜鑑、德力感化、奉仕は最高の人格者たることを物語る。

彼女は十三年の間、私を五十五回の福音傳道旅行に伴ひ、東、西、南、北へと向かつた。且つ彼女の事蹟は永久に最も高く評價さるべきものである。

ㅓ5N63

昭和八年八月三十日印刷
昭和八年九月十日發行　〔非賣品〕

横濱市中區山手町二一二番地
發行兼編輯者　横濱共立學園六十年史編纂委員
右代表者　宮崎小八郎　堀内眞澄

横濱市中區住吉町五丁目五十八番地
印刷所　横濱活版舍

終